

特別養護老人ホーム生活相談員の専門職性：ソーシャルワーク専門職性自己評価尺度（SWPI）を用いた検討

著者	山下 匡将，伊藤 優子，杉山 克己，志水 幸，武田 加代子
雑誌名	名古屋学院大学論集 社会科学篇
巻	51
号	4
ページ	201-214
発行年	2015-03-31
URL	http://doi.org/10.15012/00000099

〔論文〕

特別養護老人ホーム生活相談員の専門職性

—ソーシャルワーク専門職性自己評価尺度（SWPI）を用いた検討—

山下匡将・伊藤優子・杉山克己・志水幸・武田加代子

名古屋学院大学 / 龍谷大学短期大学部 / 青森県立保健大学 / 北海道医療大学 / 天理大学

要 旨

【目的】特別養護老人ホームにおいてレジデンシャル・ソーシャルワークを担う、生活相談員が有する専門職性の特徴を概観する。【方法】全国の特別養護老人ホーム6,545件の生活相談員を対象とした「レジデンシャル・ソーシャルワークの専門職性に関する調査」を実施し、因子分析（回転なし）およびクラスター分析（ward法）をおこなった。【結果】因子分析では、第1因子として「レジデンシャル・ソーシャルワーク専門職性」（寄与率27.2%）、第2因子として「（自律性の発揮に対する）迷い」（寄与率4.5%）が抽出された。クラスター分析では5つのクラスターが生成され、その平均年齢や経験年数の違いにより、「ビギナー」「ミドル」「エキスパート」に分類できた。【結論】「ビギナー」から「ミドル」、そして「エキスパート」へと移行する際に、“迷いの段階”を経る「専門職性の深化と迷いのらせん構造」が示唆された。

キーワード：レジデンシャル・ソーシャルワーク、生活相談員、SWPI、自律性

Characteristics of Proficiency about Residential Social Work Practice in Special Nursing Home: Through the Social Work Proficiency Inventory

Masanobu YAMASHITA, Yuko ITOH, Katsumi SUGIYAMA,
Koh SHIMIZU, Kayoko TAKEDA

Nagoya Gakuin University / Ryukoku University Junior College / Aomori University of Health and Welfare /
Health Sciences University of Hokkaido / Tenri University

発行日 2015年3月31日

I. 緒言

1. 低迷が続く日本のソーシャルワーカーの認知度と実践力

日本のソーシャルワーク実践の中核的な担い手である「社会福祉士」が誕生して、四半世紀が経過した。厚生労働省（2014）の統計によると、社会福祉士の登録者は17万7,896名に上る。しかし、社会福祉士に対する社会的な認知度は低く（朝日新聞 2008）、社会福祉士が最も多く勤務する高齢者福祉分野では（財団法人社会福祉振興・試験センター 2008）、ソーシャルワーク機能を果たすべき生活相談員の実践力の乏しさが問われている（白澤2004; 上田ら2012）。

翻って、専門職としてソーシャルワークが機能するには、豊かな知識と高い専門的技能を有するだけでなく、それらを用いるソーシャルワーカーが自らの専門職性を正しく認識している必要がある¹⁾。ところがわが国のソーシャルワーカーは、優れた実践を展開しているにもかかわらず、自身が組織内における専門職であることを強く意識できていない、ややもすると、他職種と比較して自らの専門職性を過度に低めて評価していることが少なくない（秋山2003）。

したがって、社会福祉士が最も多く所属する高齢者福祉施設での実践、すなわちレジデンシャル・ソーシャルワークにおいて、高レベルかつ良質なサービスを提供することで、「ソーシャルワークとは何か」、「社会福祉士とは何をする人か」という問いに対する答え、すなわち当該問題を打開するための有効な一つの方法を見出すことが可能と考えられる。

2. ソーシャルワーク専門職性評価の試み

いうまでもなくソーシャルワークの目標は、利用者の最善の利益を実現することである。そのために駆使すべきものが、いわゆるソーシャルワークの知識・技術・価値ということになる（Bartlett 1970）。その内実をめぐっては、これまで「専門性」「専門職性」等の用語のもとで、幾度となく議論されてきた（奥田1992; 秋山2007）。これらの用語について、本研究では南・武田（2004: 132）に準拠し、“専門性”を「職業がもつところの専門職業的特性」とし、“専門職性”を「当該専門職が有する専門職としての特性」と定義する²⁾。

南・武田は、ソーシャルワークにおける専門職性の具体的な評価方法や評価基準が示されていない状況を鑑み、自己の専門職性を位置づけるための「ソーシャルワーク専門職性自己評価尺度（Social Work Proficiency Inventory : SWPI）」を開発した。しかし、

誤解のないように強調しておきたいことは、こうした評価尺度の開発は、評価すること、それ自体を目的にしてはいないことである（南・武田2004: 9）

と述べており、SWPI42項目を評価する“プロセス”を重視している。すなわち、SWPIはソーシャルワーカーの理想像を示した「指針」としての性格が強く、「尺度」としては未だ検討の余地がある。

3. 研究目的

そこで本研究では、ソーシャルワーク専門職性における普遍性の観点から、南・武田のSWPIを基本に、高齢者福祉施設である特別養護老人ホームにおいて、レジデンシャル・ソー

ソーシャルワークを担う生活相談員が有する専門職性の特徴を概観する。

II. 研究デザイン

1. SWPI項目の検証

ソーシャルワーカーは専門職性を有しており、かつ実践場面等における行動や姿勢および志向によって評価可能であることが、本研究の前提となる。その上で専門職性の発揮には、経験や学習等の後天的要因によって差が生じると予想される。

しかし、先述のようにSWPIは測定を目的として作成されていないため、2004年同志社大学学術フロンティア推進事業〔トータル・ヒューマンケア・サポート研究機構(代表:岡本民夫)〕の一環として得られた2,202名分のデータを使用し、専門職性の測定に有用な項目を抽出する。なお、以降すべての統計解析には、PASW (SPSS) Statistics 18を使用する。

抽出にあたっては、「すべての領域を網羅することで、求められるソーシャルワーク専門職性の全体像が俯瞰できる」というSWPIの特徴を消さないように、①使命感 (C)、②倫理性 (Et)、③自律性 (A)、④知識・理論 (K)、⑤専門的技能 (S)、⑥専門職団体との関係 (PA)、⑦教育・自己研鑽 (Ed)、全7領域から1つ以上の項目が選択されるよう調整を加える。また、SWPIは、「あてはまらない」を1点、「かなりあてはまる」を5点とする配点方法を採用しているが、本研究では、0点から4点までの配点とし、合計得点が「0点」すなわち「専門職性は無い(発揮されていない)」という状態を表すための修正を加える。

統計解析の目的および手順は、次の通りである。1) Cronbach's α で、信頼性を検討する。

2) 主成分分析で、構造を確認する。3) 領域ごとに「各項目得点」と「その他の項目の合計得点」とのPearsonの積率相関係数を算出し、説明力の高い項目を抽出する。4) 因子分析(回転なし)で、抽出された項目の構造を概観する。5) Cronbach's α で、抽出された項目の信頼性を検討する。6) 「抽出された項目の合計得点」と「全項目の得点」との相関係数で、抽出された項目の妥当性を検証する。

2. 特別養護老人ホーム生活相談員の専門職性評価

上記にて抽出した項目による予備調査³⁾ののち、レジデンシャル・ソーシャルワークの実践現場に対応した表現に修正を加えた「SWPI-R (Social Work Proficiency Inventory for Residential: SWPI-R)」を用いて、全国の特別養護老人ホーム6,545件の生活相談員を対象とした「レジデンシャル・ソーシャルワークの専門職性に関する調査」を実施する(期間は、2010年5月14日～5月25日)。

調査方法には郵送法を採用し、施設には実際に生活相談業務に従事している1名だけに回答を依頼する。調査内容は、フェイスシート項目、SWPI、SWPI-Rである。

統計解析の目的および手順は、次の通りである。1) Cronbach's α で、SWPI-Rの信頼性を検討する。2) 因子分析(回転なし)で、抽出された項目の構造を概観する。3) 調査協力者をクラスター分析(ward法)にて分類し、得られたクラスターと、因子得点および基本属性等の項目との関連性を検討する。なお、量的変数との検討には分散分析および多重比較(Games-Howell法)を、質的変数との検討には χ^2 検定を用いる(いずれも有意水準は5%)。

3. 倫理的配慮

「1. SWPI項目の検証」については、既存調査データの二次的利用であり、当該データには個人を特定できる情報は含まれていない。「2. 特別養護老人ホーム生活相談員の専門職性評価」については、無記名式の質問紙によって得られたデータを、数値化し統計的に処理する。以上のことから、研究遂行上、調査協力者のプライバシーを侵襲する可能性は無い。また、調査対象者に対しては、調査の目的および本研究会が遵守する倫理的配慮について、書面によって確認し、了解した場合のみ質問紙へ記入するよう依頼した。

III. 結果

1. SWPI項目の検証

SWPIの信頼性は、 $\alpha = .923$ であった。また、主成分分析の結果、第1成分（寄与率26.1%）に35項目が合成された（表1参照）。

相関分析では、すべての項目間に有意な関連が確認されたため、データ数の大きさがもたらす影響を鑑み、なかでも相関係数が高い15項目について因子分析(回転なし)をおこなった。因子負荷量が.450以上、加えて、2因子以上に渡って高い値を示す項目が無くなるまで、因子分析をおこなった。表2に、結果を示す。

「クライアントのおかれた状況やその問題に対してアセスメントを行い、援助計画を立案できる」「援助の対象となる領域に関する幅広い知識を身につけている」「問題解決の方法について、創造的・効果的に工夫できる」「クライアントの自己決定を実現するために、必要に応じて援助チームのなかでイニシアチブがとれる」「複数のソーシャルワークの援助理論を身につけている」「ソーシャルワーク援助の進め

方を、自分自身の判断で決定することができる」「他職種と協働するときに裁量権を發揮することもできる」「実践をもとにして、論文を書くこともある」「ソーシャルワーカーにはなぜ倫理が問われるのか、その理由を理解している」「専門職団体に所属する意味を理解している」の10項目が「ソーシャルワーク専門職性（寄与率43.3%）」として抽出された。なお、使命感領域において、抽出基準を満たすものは無かった。

得られた10項目の信頼性係数は $\alpha = .846$ であり、10項目の得点と全項目の得点との相関係数は、 $r = .891$ であった。

本研究の方針から、以上の結果に使命感の項目である「この仕事は、ソーシャルワークの価値を実現するための仕事だと認識している」を含めた11項目を、SWPI-Rの原案とした。

2. 特別養護老人ホーム生活相談員の専門職性評価

(1) SWPI-R項目

予備調査に基づいた修正後のSWPI-R項目を、表3に示す。

(2) 調査協力者の概要

調査協力が得られたのは、1,404件である（回収率21.5%）。なお、回答に不備のある場合は、分析の際に適宜除外した⁴⁾。

平均年齢(±SD)は、 38.1 ± 9.3 歳。性別は、男性824名(58.7%)、女性570名(40.6%)。社会福祉分野における経験(mean±SD)は、 142.6 ± 83.6 ヵ月、相談援助職の経験(mean±SD)は、 87.5 ± 67.5 ヵ月。所持資格は、介護支援専門員900名(64.9%)、社会福祉士781名(56.3%)、介護福祉士734名(52.9%)の順に割合が多かった。なお、所持資格は複数回

特別養護老人ホーム生活相談員の専門職性

表1 SWPIの成分行

項目 No	成分1	成分2	成分3	成分4	成分5	成分6	成分7	成分8	※共通性 (因子抽出後)
20	0.674	-0.207	-0.300	0.011	0.048	-0.158	-0.175	0.064	0.650
26	0.667	-0.173	-0.244	-0.121	0.018	0.015	-0.072	-0.043	0.557
30	0.665	-0.045	-0.141	0.175	0.023	0.159	0.202	0.022	0.562
24	0.664	0.025	-0.224	0.324	-0.081	0.087	-0.033	0.043	0.614
27	0.658	-0.228	-0.218	-0.049	-0.058	-0.019	0.166	0.097	0.575
23	0.647	-0.326	-0.201	-0.049	-0.032	-0.004	0.058	0.077	0.577
22	0.632	-0.112	-0.226	-0.020	-0.125	-0.269	-0.005	0.096	0.560
16	0.624	-0.231	-0.174	-0.184	0.101	0.069	0.219	-0.188	0.605
21	0.616	0.090	-0.116	0.318	-0.027	-0.047	-0.175	0.076	0.542
40	0.568	0.123	-0.075	-0.103	-0.301	-0.268	-0.010	0.206	0.558
32	0.566	0.407	-0.029	-0.263	0.186	0.120	-0.185	-0.049	0.642
14	0.553	-0.220	-0.200	-0.225	0.302	-0.039	0.021	0.064	0.542
25	0.544	-0.272	0.041	-0.198	0.029	-0.018	-0.105	0.008	0.423
28	0.544	-0.028	0.093	-0.158	-0.243	0.181	0.038	0.288	0.506
19	0.542	-0.038	-0.216	0.258	-0.001	-0.187	-0.337	-0.103	0.568
42	0.526	0.145	-0.229	0.291	0.115	0.053	0.190	-0.002	0.487
8	0.526	-0.060	0.050	0.026	0.075	0.186	-0.371	-0.128	0.477
5	0.522	-0.009	0.371	0.185	0.065	-0.060	-0.023	-0.043	0.455
29	0.509	-0.307	-0.004	-0.284	-0.095	-0.069	0.047	-0.040	0.452
4	0.506	0.016	0.353	-0.041	-0.003	-0.044	0.216	-0.267	0.502
34	0.501	0.363	0.094	-0.148	-0.148	0.043	0.114	0.088	0.458
13	0.501	-0.255	-0.150	-0.140	0.252	0.030	0.215	-0.264	0.538
7	0.467	-0.080	-0.082	0.070	-0.099	0.152	-0.383	-0.364	0.548
37	0.466	0.364	-0.193	0.042	0.015	-0.157	-0.082	0.037	0.422
10	0.464	-0.124	0.223	-0.104	-0.148	0.240	0.214	-0.241	0.475
39	0.462	0.456	0.047	-0.052	-0.313	-0.275	0.169	-0.062	0.632
38	0.454	0.344	-0.174	-0.008	0.243	0.028	0.067	0.127	0.436
2	0.443	-0.086	0.426	0.068	0.228	-0.177	-0.124	0.060	0.491
11	0.434	-0.161	0.367	-0.110	-0.350	0.252	-0.132	0.195	0.602
41	0.432	0.136	-0.053	0.276	-0.305	-0.151	0.228	-0.195	0.490
9	0.429	0.152	0.059	0.318	-0.132	0.241	-0.122	-0.095	0.411
18	0.406	0.149	0.093	0.273	0.062	0.315	0.219	0.117	0.435
17	0.406	-0.185	0.171	-0.187	-0.044	0.139	0.126	0.071	0.305
1	0.404	0.037	0.349	0.088	0.145	-0.158	0.098	-0.371	0.488
12	0.403	-0.318	0.321	-0.038	-0.279	0.038	-0.188	0.142	0.503
33	0.501	0.526	0.092	-0.134	-0.121	-0.149	0.052	-0.041	0.596
31	0.333	0.488	-0.136	-0.382	0.304	0.110	-0.152	0.050	0.644
6	0.374	-0.130	0.534	0.209	0.187	-0.184	-0.029	0.123	0.570
3	0.342	-0.091	0.459	0.033	0.312	-0.348	-0.029	0.106	0.568
35	0.384	0.357	0.283	-0.335	0.041	0.080	-0.082	-0.011	0.482
15	0.339	-0.069	0.026	0.226	0.331	0.070	0.209	0.354	0.455
36	0.318	0.182	0.155	0.177	0.150	0.377	-0.051	0.048	0.359
寄与率	26.1	5.6	5.2	3.6	3.3	2.8	2.7	2.4	

※「項目No」に対応する設問文については、文末資料を参照。

表2 抽出項目の因子構造（最終）

項目 No	領域	設問文	因子
			1
26	S	クライアントのおかれた状況やその問題に対してアセスメントを行い、援助計画を立案できる。	.755
20	K	援助の対象となる領域に関する幅広い知識を身につけている。	.748
27	S	問題解決の方法について、創造的・効果的に工夫できる。	.718
16	A	クライアントの自己決定を実現するために、必要に応じて援助チームのなかでイニシアチブがとれる。	.713
24	K	複数のソーシャルワークの援助理論を身につけている。	.677
14	A	ソーシャルワークの進め方を、自分自身の判断で決定することができる。	.674
13	A	他職種と協働するときに裁量権を発揮することもできる。	.607
42	Ed	実践をもとにして、論文を書くこともある。	.551
8	Et	ソーシャルワーカーには何故倫理が問われるのか、その理由を理解している。	.550
32	PA	専門職団体に所属する意味を理解している。	.540
寄与率			43.3

表3 SWPI-R項目

領域	設問
C	・ソーシャルワークの価値を意識して、仕事に臨んでいる
Et	・ソーシャルワーカーには何故倫理が問われるのか、その理由を説明できる
A	・他職種と協働するときに、自分の意見が採用されている ・ソーシャルワーク援助の進め方は、その時々の利用者の状況にもとづいて、自分自身で判断している ・利用者の自己決定を実現するために、関係者の中でイニシアチブをとっている
K	・適切な援助のために、対象領域に関する知識にとらわれず、意図的に幅広く学んでいる ・複数のソーシャルワークの援助理論を、意図的に使い分けている
S	・援助計画を策定する際には、利用者の意向を常に優先している ・より良い援助のために、多大な努力を要しても新しい方法を試みている
PA	・専門職団体に所属する意義を意識して、当該活動に参加している
Ed	・学会や各種大会で、実践をまとめて報告している

答項目である。

(3) 統計解析

SWPI-Rの信頼性は、 $\alpha = .791$ であった。因子分析の結果を、表4に示す。

「学会や各種大会で、実践をまとめて報告し

ている」を除く10項目が、第1因子「レジデンシャル・ソーシャルワーク専門職性」として抽出された（寄与率27.2%）。第2因子については、因子負荷量の値が高い項目は見当たらないが、比較的値の高い自律性領域に関する項目すべてにおいて負の値が示されていることか

表4 SWPI-Rの因子構造

領域	設問文	第1因子	第2因子
K	複数のソーシャルワークの援助理論を、意図的に使い分けている	.653	.159
C	ソーシャルワークの価値を意識して、仕事に臨んでいる	.608	.150
Et	ソーシャルワーカーには何故倫理が問われるのか、その理由を説明できる	.594	.107
A	利用者の自己決定を実現するために、関係者の中で必要に応じてイニシアチブをとっている	.562	-.305
S	よりよい援助のために、多大な努力を要しても新しい方法を試みている	.550	.003
K	適切な援助のために、対象領域に関する知識にとらわれず、意図的に幅広く学んでいる	.533	.079
A	ソーシャルワーク援助の進め方は、その時々の利用者の状況にもとづいて、自分自身で判断している	.492	-.263
A	他職種と協働するときに、自分の意見が採用されている	.492	-.325
PA	専門職団体に所属する意義を意識して、当該活動に参加している	.437	.270
S	援助計画を策定する際には、利用者の意向を常に優先している	.408	-.112
Ed	学会や各種大会で、実践をまとめて報告している	.314	.273
寄与率		27.2	4.5
因子名		レジデンシャル・ソーシャルワーク専門職性	(自律性の発揮に対する) 迷い

ら、「(自律性の発揮に対する) 迷い」とした(寄与率4.5%)。

クラスター分析によって構成された5つのクラスター〔クラスターⅠ(417名)、Ⅱ(396名)、Ⅲ(171名)、Ⅳ(183名)、Ⅴ(80名)]の特徴を、以下に示す。

①分散分析および多重比較による検討

レジデンシャル・ソーシャルワーク専門職性因子得点では、すべてのクラスター間に有意差がみられた(Ⅴ>Ⅱ>Ⅰ>Ⅲ>Ⅳ)。分散分析は、 $F(4, 1242)=566.29$, $MSE=0.36$, $p=.000$ であった。クラスターⅤの得点(1.84 ± 0.06)が最も高く、Ⅱ(0.52 ± 0.03)、Ⅰ(0.03 ± 0.03)、

Ⅲ(-0.66 ± 0.04)、Ⅳ(-1.38 ± 0.05)の順に続いた。

迷い因子得点では、クラスターⅠとⅡ・Ⅲ・Ⅴ、ⅣとⅡ・Ⅲ・Ⅴの間に有意差がみられた(Ⅰ<Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ, Ⅳ<Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ)。分散分析は、 $F(4, 1242)=41.59$, $MSE=0.89$, $p=.000$ であった。クラスターⅤの得点(0.41 ± 0.10)が最も高く、Ⅱ(0.36 ± 0.04)、Ⅲ(0.20 ± 0.07)、Ⅰ(-0.34 ± 0.04)、Ⅳ(-0.38 ± 0.08)の順に続いた。

年齢では、クラスターⅤとその他、ⅡとⅣの間に有意差がみられた(Ⅴ>Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ, Ⅱ>Ⅳ)。分散分析は、 $F(4, 1184)=7.09$, $MSE=82.78$, $p=.000$ であった。クラスター

Vの年齢(42.66±1.05)が最も高く、II(38.50±0.47)、I(37.88±0.47)、III(36.99±0.68)、IV(36.29±0.64)の順に続いた。

相談援助職における経験月数では、Vとその他、IVとI・IIの間に有意差がみられた(V>I・II・III・IV、IV<I・II)。分散分析は、F(4, 1141) = 8.59, MSE = 4524.04, p = .000であった。クラスターVの経験(124.58±9.53)が最も長く、II(91.85±3.48)、I(89.31±3.36)、III(83.4±5.58)、IV(71.01±4.86)の順に続いた。

② χ^2 検定による検討

職名において、有意差がみられた〔 $\chi^2(4, 1241) = 26.74, p = .000$ 〕。クラスターVにおける生活相談員の割合が少なかった(68.4%)〔I(88.2)、II(84.5)、III(88.8)、IV(90.1)〕。

職場内スーパービジョンにおいて、有意差がみられた〔 $\chi^2(4, 1230) = 19.52, p = .001$ 〕。クラスターIIIおよびIVにおける経験者が少なく(それぞれ30.0%、26.1%)、Vにおける経験者が多かった(48.7%)〔I(38.7)、II(40.2)〕。

職場外スーパービジョンにおいて、有意差がみられた〔 $\chi^2(4, 1221) = 66.23, p = .000$ 〕。クラスターIIIおよびIVにおける経験者が少なく(それぞれ36.1%、22.1%)、Vにおける経験者

が多かった(65.8%)〔I(41.8)、II(52.3)〕。

スーパーバイザー経験において、有意差がみられた〔 $\chi^2(4, 1217) = 45.50, p = .000$ 〕。クラスターIIIおよびIVにおける経験者が少なく(それぞれ22.4%、20.1%)、Vにおける経験者が多かった(55.1%)〔I(35.6)、II(38.9)〕。

以上の結果をまとめると、表5のようになる。

各クラスターは、その平均年齢や経験年数の違いにより「ビギナー」「ミドル」「エキスパート」の3カテゴリーに分類が可能であった。

①クラスターIおよびII—ミドル—

年齢がクラスターIIIおよびIVと比較して高く(相談援助職の経験が長く)、クラスターVより低い(相談援助職の経験が短い)グループである。

クラスターIは、専門職性因子得点が中程度、迷い因子得点が低い。クラスターIIは、専門職性因子得点が中程度、迷い因子得点が高い。

②クラスターIIIおよびIV—ビギナー—

年齢が他のクラスターと比較して低く、相談援助職の経験が短いグループである。

クラスターIIIは、専門職性因子得点が低く、迷い因子得点が高い。クラスターIVは、専門職性因子得点が低く、迷い因子得点が低い。

表5 クラスターの特徴

クラスター	I	II	III	IV	V
年齢	中	中	低	低	高
相談援助職の経験	中	中	短	短	高
職場内外スーパービジョン経験	中	中	少	少	多
専門職性因子得点	中	中	低	低	高
迷い因子得点	低	高	高	低	高
カテゴリー	ミドル		ビギナー		エキスパート

③クラスターV—エキスパート—

年齢が他のクラスターと比較して高く、相談援助職の経験が長いグループである。専門職性因子得点が最も高く、迷い因子得点も高い。

職場内外におけるスーパービジョン経験が豊富だけでなく、スーパーバイザーとしての経験も有している。

IV. 考察

1. ソーシャルワーク専門職性の特徴

SWPI項目を検証した結果、42項目が示す当該専門職性を、10項目によって概観できることが明らかとなった。そのうち「自律性」に関する項目は3項目で最も多く、続いて「知識・理論」および「専門的技術」に関する項目が2項目ずつ抽出された。これらの項目は、ソーシャルワークの共通基盤となる知識・技術に対応する領域である。その一方で、価値に相当する「使命感」については、1項目も抽出されなかった。

Butrym (1976) によれば、「価値に基づいた目的」「目的を行為に移す手段」「社会的脈絡の独自の組み合わせ」の3つが、ソーシャルワーク特有のアイデンティティを生み出す。うち「目的を行為に移す手段」には、「道具的価値」「応用知識」「実践技術」が含まれる。「自律性」の発揮を専門職性表出の“結果”として捉えた場合、「知識・理論」「専門的技術」は表出可能な“手段”，「使命感」は表出困難な“価値”として解釈できる。すなわち、ソーシャルワーク専門職性の特徴として「表出された状態」と「内に秘められた状態」の二つの様相を認めた場合、内に秘められた根底としての「使命感」を表出するには、手段等のなんらかの“形（行動）”に置き換える必要があり、抽象度が高い設問文

となった「使命感」については（自己評価ではあるが）評価として反映されにくいことが統計的に確認されたと言える。

しかし、「使命感」の項目については、『専門職性』の内容を検討する際にも、その中に『価値観』を省くことはできない（秋山2007:124）」との指摘や、ソーシャルワーク専門職性全体を俯瞰可能な尺度づくりを目的にしていたことから、必要不可欠な要素と判断し、「この仕事は、ソーシャルワークの価値を実現するための仕事だと認識している」を採用した。

2. 特別養護老人ホーム生活相談員の専門職性

因子分析の結果、SWPI-Rには、予測していた「専門職性因子」に加え、寄与率は非常に低いものの、主に自律性の発揮を阻害すると考えられる「迷い因子」の存在が看取された。クラスター化では、5つのクラスターが構成され、年齢および相談援助経験等の類似性から、「ビギナー」「ミドル」「エキスパート」の3カテゴリーによる類型が可能であった。5つのクラスターについて、「専門職性因子得点」を縦軸、「迷い因子得点」を横軸とした布置図を示す（図1参照）。

相談援助職の経験の長さにしたがって布置図を読み解くと、「ビギナー」から「ミドル」、「ミドル」から「エキスパート」へと移行する際に、“迷いの段階”を経ていることがわかる。専門職性を向上させていく際に、迷いの有る（強い）時期と無い（弱い）時期を渡り行くことから、これを「専門職性の深化と迷いのらせん構造」と命名する。

保正（2011a, 2011b, 2012）は、医療ソーシャルワーカーを対象としたインタビュー結果から、新人期・中堅期・ベテラン期の特徴およびベテランに至るまでの変容過程とその契機に

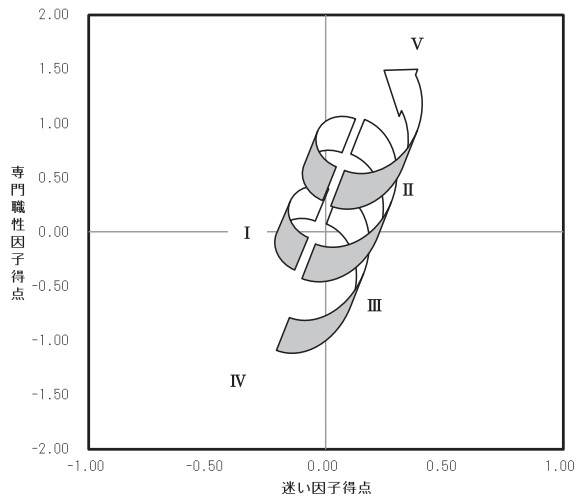


図1 レジデンシャル・ソーシャルワーク専門職性および迷い因子得点の布置図

- ※1 迷い因子得点については、マイナス方向に向かうほど迷いが強い傾向にある。
- ※2 らせん状の矢印は、相談援助職の経験を表している。クラスターⅣの経験が最も短く、Ⅲ、Ⅰ、Ⅱの順に続き、最も長いクラスターⅤに向かっている。

ついて考察している。そのなかで、中堅期やベテラン期は、自分だけでなく相談室として一定の仕事をしなければならないことを認識し、管理職や上司として相談室を守る自覚をもつ「専門職としてのスタンス」を確立する時期であり、自らの力量や置かれている状況の「限界認識」や「自己省察」によって実践能力を見直すことが、実践能力に変容をもたらすとしている。これに基づいて、結果解釈の視点を「専門職性を発揮する機会に恵まれているために迷いを有する機会も多い」や「迷いを有しているからこそスーパービジョンを活用している」へと転換すると、迷い因子を単純にネガティブな因子であると結論付けることはできない。

いずれにしても今回の結果は、利用者や家族、そして他職種などとの関係性において、生活相談員が「自己省察」する様子を数量的に「見える化」できる可能性を窺わせる。レジデンシャル

・ソーシャルワーク実践については、職位に対する意識の相違（原田2000）、相談員の人数配置や組織構造といった施設特性などの外的要因から受ける影響（三輪2004；和気2006；上田ら2012）も示唆されている。今後、自律性の発揮という視点から、レジデンシャル・ソーシャルワーク実践に対する内的・外的要因の影響について定量的に明らかにすることで、高い専門職性に基づいた質の高いサービス提供の後押しが可能となるだろう。

3. 本研究の限界と課題

本研究は横断研究であり、考察で示した「専門職性の深化と迷いのらせん構造」については、別途縦断研究による確認作業が必要である。また、因子分析における寄与率の低さや、使命感の項目にみられる抽象度の高さが確認されたこと、そして、「レジデンシャル・ソーシャルワー

クの専門職性に関する調査」の実質回収率が2割弱であったことから、結果の一般化には多くの問題が残されている。今後、SWPI-Rの精緻化に向けた更なる取り組みが求められる。

注

- 1) 秋山(2002)は、「専門性」について、①最も抽象度の高い行為像・行為主体像(社会福祉学を主な知的基盤とする知識・技術・倫理から構成される行為およびその主体の理論的・理念モデル)としての「専門性」、②「専門性」を職務や特定の行為環境のもとで展開することを想定して抽出される、より具体的・経験的な「専門職性」、③それらの行為環境について、法制度的・政策的にみて実行可能な具体的条件(養成カリキュラム、倫理規定、専門職団体、労働・待遇条件、配置基準等)を備えた「専門職制度」、以上3つの位相を示している。
- 2) つまり専門性の尺度としては有るか無いかが基準となり、専門職性の尺度としては高いか低いかが基準となる。
- 3) 特別養護老人ホームに勤務する生活相談員16名に、SWPIの設問文について検討してもらい、例えば、「裁量権を発揮する」という表現を「自分の意見が採用されている」といった生活相談員に馴染みやすい表現に変更した。
- 4) SWPIおよびSWPI-Rの尺度得点については、各項目への回答に1項目でも不備が確認された場合、当該得点の算出をおこなわず「欠損値」として処理した。なお、SWPI-Rの有効回答数は1,259件であり、この場合、本調査への有効回答率は89.7% (実質回収率19.2%)となる。

文献

秋山智久(2002)「社会福祉実践をめぐる資格制度」
仲村優一・窪田暁子・岡本民夫・太田義弘編『講座戦後社会福祉の総括と二十一世紀への展望 IV

実践方法と援助技術』ドメス出版。

- 秋山智久(2003)「21世紀におけるソーシャルワーカーの専門職性と存在意義：社会福祉専門職の全国調査より」『ソーシャルワーカー』(7), 15-24.
- 秋山智久(2007)『社会福祉専門職の研究』ミネルヴァ書房。
- 朝日新聞東京本社広告局(2008)『「社会福祉士が変わる」集計結果報告書』(http://www.jacsw.jp/publicity/20080526_27_asahi_shinbun_questionnaire.pdf, 2012.3.26).
- Bartlett, H. M. (1970)「The Common Base of Social Work Practice.」(=1978, 小松源助訳『社会福祉実践の共通基盤』ミネルヴァ書房)。
- Butrym, Z. T. (1976)「The Nature of Social Work., The Macmillan Press.」(=1986, 川田誉音訳『ソーシャルワークとは何か』川島書店)。
- 原田重樹(2000)「高齢者施設におけるソーシャルワーカーの専門性に関する一考察(第3報)」『老人生活研究』(353), 24-39.
- 保正友子(2011a)「医療ソーシャルワーカーの実践能力変容過程—新人期から中堅期に至る3段階—」『社会福祉学』52(1), 96-108.
- 保正友子(2011b)「医療ソーシャルワーカーの実践能力変容過程—ベテラン4人の事例に基づく新人期・中堅期・ベテラン期の実践能力の特徴—」『ソーシャルワーク学会誌』23, 59-72.
- 保正友子(2012)「新人期からベテラン期に至る医療ソーシャルワーカーの実践能力変容過程—修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチによる17人のデータ分析に基づいて—」『ソーシャルワーク研究』38(2), 3846.
- 厚生労働省(2014)「社会福祉士の登録者数の推移」(http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/seikatsuhogo/shakai-kaigo-fukushi1/shakai-kaigo-fukushi3.html).
- 南彩子・武田加代子(2004)『ソーシャルワーク専門職性自己評価』相川書房。
- 三輪直之(2004)「特別養護老人ホームにおける生活相談員の業務と専門性との関連について—生活相談員への質問紙調査から—」『人間生活科学

- 研究』40(1), 11-22.
- 奥田いさよ (1992)『社会福祉専門職性の研究』川島書店.
- 上田正太・竹本与志人・岡田進一・白澤政和(2012)「特別養護老人ホームの生活相談員が行うソーシャルワーク実践の構造に関する検討」『ソーシャルワーク学会誌』(24), 15-27.
- 白澤政和 (2004)「日本における社会福祉専門職の実践力—評価と戦略—」『社会福祉研究』90, 13-20.
- 和気純子 (2006)「介護保険施設における施設ソーシャルワークの構造と規定要因—介護福祉施設と介護老人保健施設の相談業務の比較分析を通して—」『厚生指標』53 (15), 21-30.
- 財団法人社会福祉振興・試験センター (2008)「介護福祉士等現況調査」(http://www.mhlw.go.jp/bunya/seikatsuhogo/haaku_chosa/d1/01.pdf, 2013.3.23).

特別養護老人ホーム生活相談員の専門職性

資料 SWPI項目内容

領域	No	設問文
使命感 (C)	1	自分の仕事を努力して続けることにより自己実現を図れると思う
	2	自分の仕事は、弱い立場の人や権利が侵害されている状態にある人の力になる仕事だと思う
	3	この仕事は、他者に献身するという側面をもっている
	4	単に生活手段としてではなく、仕事には一種の使命感をもっている
	5	この仕事は、ソーシャルワークの価値を実現するための仕事だと認識している
	6	この仕事は、公共の福祉に貢献するものであると思う
倫理性 (Et)	7	自分の所属している職能団体の倫理綱領をよく理解している
	8	ソーシャルワーカーには何故倫理が問われるのか、その理由を理解している
	9	判断に迷うとき、倫理綱領を参照する
	10	所属機関や同僚の非倫理的行動を見過ごすことはできない
	11	いかなる状況にあろうとクライアントの人としての尊厳を守ることを念頭においている
	12	クライアントには、中立・公正な態度で接している
自律性 (A)	13	他職種と協働するときに裁量権を発揮することもできる
	14	ソーシャルワーク援助の進め方を、自分自身の判断で決定することができる
	15	他者の指示によらず仕事を進めていくことをめざしている
	16	クライアントの自己決定を実現するために、必要に応じて援助チームのなかでイニシアチブがとれる
	17	責任を伴った判断をしなければならない場合がある
	18	開業することもできる仕事であると思う
知識・理論(K)	19	社会福祉に関する幅広い知識を系統立てて学んでいる
	20	援助の対象となる領域に関する幅広い知識を身につけている
	21	クライアントを理解するための諸理論を学んでいる
	22	幅広く、かつ最新の社会資源の情報を有している
	23	人とそれを取り巻く状況を理解する幅広い知識および洞察力を有している
	24	複数のソーシャルワークの援助理論を身につけている
専門的スキル (S)	25	クライアントとの間で適切な人間関係が築ける
	26	クライアントのおかれた状況やその問題に対してアセスメントを行い、援助計画を立案できる
	27	問題解決の方法について、創造的・効果的に工夫できる
	28	クライアント自身の力を引き出すよう心がけている
	29	他職種や同僚とうまく連携し、適切な人間関係が築ける

	30	必要に応じて社会に向かって行動や発言をすることができる
専門団体との 関係 (PA)	31	専門職団体に所属している
	32	専門職団体に所属する意味を理解している
	33	専門職団体の提供する教育・研修・現任訓練等のプログラムには、日頃から関心をもっている
	34	必要とあらば所属する専門職団体の活動に協力する用意がある
	35	専門職団体を通してソーシャルワーカー全体のレベルの向上を図ることは大切だと思う
	36	専門職団体に所属することは自己規制につながると思う
教育・自己研 鑽 (Ed)	37	仕事上必要な専門誌や専門書などを定期的に購読している
	38	関連学会に所属している
	39	講演会や研修等にはできるだけ参加している
	40	仕事に関連する最新の情報を入手し、更新するよう心がけている
	41	様々なスーパービジョンの機会を活用している
	42	実践をもとにして、論文を書くこともある